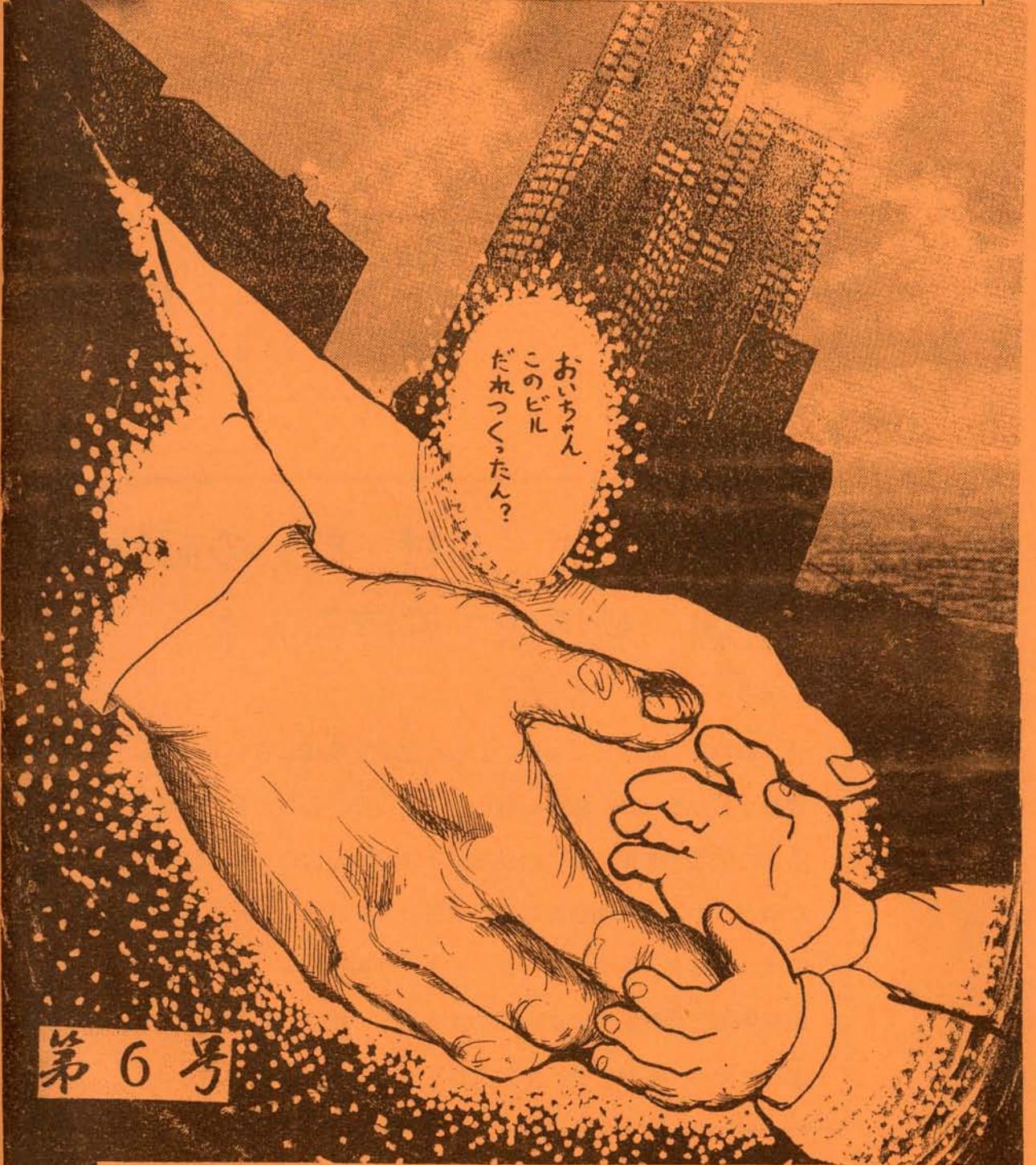


1997年9月30日(奇数月発行)

97・9

新宿ダンボール村通信

編集・発行 新宿連絡会



おーちゃん
このビル
だれつくったん?

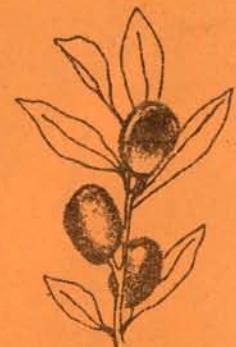
第6号

特集：排除のための“ジリツシエン”一行き詰まる都の収容プラン

定価 300円

◇もくじ◇

	ページ
あのね	2
大盛況！新宿夏まつり	5
海を渡った新宿の写真	7
今号の特集	9
名古屋・林訴訟に不当判決	16
墨ぬり国賠訴訟にご支援を！	17
巻末エッセイ	18



『新宿ダンボール村・闘いの記録』

全国一般書店で好評発売中！

ルポライター 鎌田慧氏も推薦！

「『おれたちはゴミじゃない』との主張が明確にされている本。

理解するためには、相手の言い分に耳を傾けるしかない。路上生

活者の生活と意見がよくわかる。青島都知事は率先して読んでみ

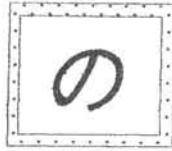
たらどうか。」（朝日新聞9月7日付・書評欄より）

現代企画室刊。320ページ。2800円。

山谷労働者会館あてにまとめて注文してくださっても結構です。

また地元の図書館にリクエストしてください！





もりひであき はなし
・森英明さんのお話・

久しぶりだなあ。待っていたんだよ。どうしているのかなって、思っていた。みんなが来るときも、あんたいなかったから。この頃は少し忙しいのかい。

俺の方? うーん、近ごろは体調がわるくてね。もう何日も仕事に行っていない。ずっとね、腹がくだってるんだ。だから仕事に行ってもよ、これじゃ迷惑をかけてしまうだろう。仕事の最中に、腹がくだったり、頭が痛いとかね言って、途中でやめても嫌がられるし、かえって周りのひとに迷惑をかけてしまうだろうから。

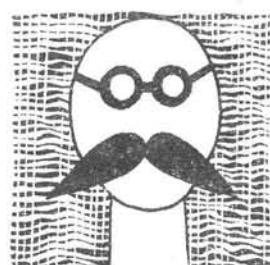
何だかなあ、悪いものでも食ったのかなと思うし‥。こんな生活だらう。だから、もうどうしようもないよ。頭も痛いしね。^{がくし}福祉で薬もらって、ほらこれだよ。一日二回って書いてあるだろう。だから、のんくるけど、ちっとも治らないんだ。ずっと仕事に行けないよ。仕事に行かないと、金も入らないし、どうしようもないよ‥。

俺にいま、嫁さんがいたらいいと思う。今いつとも、嫁さんがほしいなあと思ってるんだ。嫁さん? もらったことあるよ。籍は入れなかつたけど、

何年かいつしょに暮らしていた。もうずいぶん昔の、若い頃のことだよ。そのときは、別れちゃったんだ。いろいろと合わないことがあって。別れちゃったけど、今度はからずだいじにすると思うから。

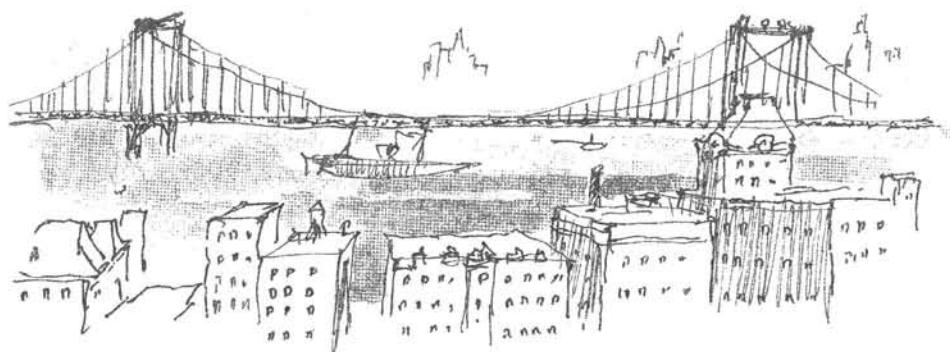
女人なんてそんなに稼げないだろう。たいへんな思いをしてアルバイトでもして、それでも8万ぐらいだろう。嫁さんがいたら、俺が毎日仕事行って、20万ぐらい稼いで、嫁さんに8万ぐらいアルバイトしてもらって、そうしたら合わせて28万だから。28万もあれば、ずいぶんいいだろう。じゅうぶん楽に暮らせるよなあ。アパートに住んで、部屋代を払って、その残りでいろいろ買ったりできるだろう・・。俺はほとんど金はいらないんだ。俺はぜんぜん使わないから。一日の弁当代とジュース代で2千円ぐらい、それだけでいいんだ。タバコも酒もやらない、買いたいものも何もないし、仕事が終わったらまっすぐ家にかかる。残りを全部嫁さんの好きに使わせてやるんだ・・。

俺今だったら、ぜったいに嫁さんをだいじにする。今度はもう、ぜったいに大丈夫なんだ。一生けんめい嫁さんのために働く。今はね、少し体がわるいから仕事を休んでいるけど、毎日毎日一生けんめい働いて、楽をさせてやる。誕生日のときは花を買ってやるし・・。帰りに花を買って帰るんだ。俺はこれでもけっこうまめだから、そういうのは忘れないよ。きちんとやるよ。



嫁さんがほしいなあと、思うよ。嫁さんがいたら、俺でもけっこうやれ
ると思うんだ。俺はそう、熊本の出身なんです。九州の熊本…。だから、
同郷の嫁さんがいい。こっちのひとは考え方がちがうし、合わないだ
ろうと思うから。九州のひとは、こっちのひとと違って、がまん強いし、
気持ちがやさしいんだよ。おなじ九州のひとだったら、気が知れてるし、
熊本のひとなら、俺も熊本の人間として、そのひとの親に対して顔が上げ
られなくなるようなことはできないだろう、なあ。そのひとの父親や母親
に対して、おなじ熊本の人間として、まちがったことはできないよ。

まあ、はやく体をなおしたいよ。体をなおして、仕事をもらって、毎日
働きたいんだ。はやく仕事に行きたいよ。





たい せいかつ

大盛況！新宿夏まつり

2000人の「夏の夜の夢」



第4回新宿夏まつりが8月17日、新宿中央公園ちびっこ広場で行なわれました。今年はコンサート部門を中心に、例年よりも長い準備期間をかけて企画を行ない、初めて新宿に関わる多くの若者たちが準備段階から実行委員会に参加してくれました。このことは、東京都内で若者たちによる野宿者襲撃が相次ぐという情勢の中、希望のもてる出来事だったと思います。

新宿の西口インフォメーション・センター前では、まつりの3週間前から日曜日の焼き出しの前の時間を使って盆踊りの練習が行なわれ、野宿の仲間による「寄り合い」の場でもまつりの作り方について話し合いがなされました。まつりの前日の16日の晩には、「前夜祭」ということで、「亡くなった仲間を追悼する会」が行なわれ、この1年間に新宿区内、または入院先の病院で亡くなったことが判明した51人の仲間をみんなで追悼しました。

まつり当日の17日は朝8時からの準備作業に約50人の新宿の仲間が参加。荷物の運搬や会場設営に汗を流します。昼過ぎからお客様さんが訪れるようになり、今年の目玉の一つであるフリーマーケットもにぎやかになってきました。野宿の仲間が楽しめる企画としては「囲碁・将棋」と「腕相撲大会」があったのですが、囲

暮・将棋に人気が集まっていたようです。恒例の無料散髪は大繁盛（なんと75人が刈ってもらったとか）。そのとなりの芝生では、新宿の仲間が公園に来た子どもたちと昔の遊びと一緒に楽しむほのぼのとした光景も見ることが出来ました。

午後1時からはライブ開始。ちんどん屋の朝日堂さんの登場に会場はいやがおうでも盛り上がります。出演バンドは計11組。中には舞踏やアクション・ペインティングとの組み合わせもあって、観客を楽しませていました。

夜になり、炊き出し・乾杯のあとはトリのソウル・フラワー・モノノケ・サミットの登場。神戸の仮設住宅を回ってのライブで有名な彼らは、ちんどん屋ロックとでも言うべき音楽で世代を越えた共感を引き出していました。その後、新宿の仲間によるカラオケ大会、ミュージシャンの生演奏による盆踊りと続き、新宿の熱い夜はふけていきました。

大盛況に終わった夏まつりですが、今後に向けての課題も残りました。反省会の席上では「若者のノリに新宿の仲間がついていけず、引いてしまった」という意見も出て、世代を越えた交流の難しさも痛感しました。来年の夏まつりに向けてはこうした点をふまえて議論を進めていきたいと思っています。何はともあれ、皆様のご協力、ご支援、本当にありがとうございました。

第4回夏まつりの報告集を現在、作成中です。お問い合わせはtel 03-5273-5065実行委員会・稲葉まで。



海を渡った新宿の写真ー高松英昭さんに聞く

昨年12月、新宿の路上を沸かした路上写真展（新宿ストリートプロジェクト）。計11人の写真家による写真が多くの通行人の注目を集めたのは、まだ記憶に新しいところです。その写真が今度は、フランスのペルピニャンで開かれた第9回国際フォトジャーナリズム・フェスティバルに、2000を越えるテーマの応募の中から選ばれ、出展されたというので、その模様をフランスから帰国したばかりのカメラマン、高松英昭さんにうかがいました。

ペルピニャンのフォトジャーナリズム・フェスティバルというのは、日本で言う「村おこし」的な感覚で、世界的なイベントを行なっているのですが、そこへ「日本のホームレスのことを外国でも知ってもらおう」ということで、応募したら選考で選ばれて出展することになりました。

それで向こうの反応というのは、「日本にもこういう人がいたのか」というもので、「金持ちの国のホームレス」ということで、まず「めずらしい」という受け止め方だったと思います。フランスには「ラルー」という雑誌があって、それをホームレスの人が販売して生計を立てる、ということをしているのですが、この編集者と話したときも、まず驚きが最初にあるんですね。でもすぐ理解してくれるんです。「この状況はフランスと同じではないか」ということで。例えば本（古雑誌）を売ったり、このようなインフォーマルな部門での経済活動に関わっていること

も、フランスと似ていまして、「要は一緒なんですね」というところで話が進んでいくわけです。

フランスの人は、日本のホームレスの人たちがどういうところで、どういうふうに生活をしているのか、というところに関心があって、例えばダンボールを使っているというのも彼らには意外だったようで、写真もそういう状況がわかる写真に関心が集まっていたようです。強制撤去の写真も彼らには驚きだったようで、撤去自体はフランスでもあるのですが、「あの日本でも実力をもって追い出すことをするのか」というように受け止められていたようです。

とにかく日本のホームレスの状況というのは、まったく知られてなくて、「日本にもホームレスがいて、フランスのホームレスと似たような状況にいる」ということが驚きだったようです。

(談)



ガードマンによる連日の「退去勧告」
が続く4月末、都はいきなり北新宿で、
自立支援センター暫定実施を行うと発表。
収容人数80人、期間1か月。「西口地
下広場の環境整備」とセットとのこと。



「寝耳に水」の北新宿住民は猛反発。
5月の住民説明会は大紛糾し、住民が反
対運動を開始。新宿区も「関与せず」の
立場。6月には新宿区議会で「白紙撤回」
を求める住民の請願が採択される事態に。



排除とセットの収容に新宿の仲間は
当然反対。連絡会は毎週2回、北新宿
周辺で住民に反対をアピール。住民と
は立場は違うものの「白紙撤回」で一
致。6月には170人で地域をデモ。



特集：排除のための“ジリツシェン” 一行き詰まる都の収容プラン

8月25日、待ちかまえた100人の仲間
の説明を求める声に、都職員は何も答えられ
ず、すごすごと退散。街頭相談はいつも
まにやら中止に。2回目を9月中旬にやる
と言うも、結局、できずじまい。当事者無
視の収容プランはついに袋小路に。そろそ
ろ頭を冷やして当事者の話に耳を傾ければ
いいのに。わかんないのかなあ……。



8月21日に突如、発表された「暫定
的自立支援策」は25人ずつを救世軍・
新光館など2か所で収容し、1か月の
うちに就労させるというもの。25日に
新宿西口で街頭相談をしようと企む。



都は住民懐柔のため、収容人数を減
らすなどの「改善案」を提示するが、
住民は拒否。北新宿収容所計画は事実
上、凍結に。困った都は救世軍・新光
館を使った新たな収容計画を発表。

「暫定的自立支援策」に対する

ダンボール村住民の反対の声

「まー、反対している理由つづうのは、西口から追い出そうとしているから。新光館しんこうかんって一のは、雰囲気ふんいきもよくないし。西口から出たくない。住み慣れたところつづうか、また西口に戻もどってくる。新光館しんこうかんから行ってもろくな仕事じゃないだらうし、それなら馬場ばばから行ってるほうがよっぽどいい仕事に就けると思う。」(Kさん)

「んーん。あそこに入っても何にもならないつづうこんだろ。あそこに入ったからって何にもならない。行ったり、あそこに入ったからって確實に仕事があるってわけじゃないだろ。仕事もちゃんとした、うん、長く安定して、賃金さんきんも確實に出て、保障ほじゅもついてるって一ならいいよ。期待またいできない。都は、住宅だ、医療だつづうけど住宅なんか探してもいらないだろ。第一に、高齢者こうれいしゃ向けの仕事なんか探ししてもないだろ。医療いりょうもだめ。」(Nさん)

「なぎさ寮りょうに行つたことがありますよ。でも、団体生活は自分には向いていないと思いますよ。あんまりやつたことないから。だから今度のも行きたくないです。それよりここに住んで、仕事に行くほうがよっぽどいい。ん！」（kさん）

「我々のためにならない。ただ追い出しのためにしかならない政策だ。我々との妥協の接点が何にも無え。我々の要求は仕事が欲しい。月に20日、1日に5000円～6000円でも保障してくれれば、黙だまってても出でく。そうだろ？」（Gさん）

「要するに、都がやってることは、場当たり的なことが多い。ね。今までやっている無駄遣むだづかいとか。ん？そ、東京都の。ん、仕事を保証ほしょうしてくれないし。とにかく、仮設住宅かせつじゅうたく、ね、住所が欲しい。ん。そうすれば仕事も就けるし、えー、税金も払はえる。ね？無駄遣むだづかいが多いから作れないんだ。空あいてる土地も、いっぱいあるはずだったのに。ん。そういうことです。」（Yさん）

「んーん、都は、ろくなこと、やってないから。・・・我々の意見も聞かないし。・・・やるんなら、もうちょっと、まともなことをやってほしい。・・・やる意味がないんだな。・・・それだけです。」(Sさん)

「(新光館について) 単刀直入に言って、都の連中とぐるになつて、我々をいい加減な扱い方をしているのは、赦しがたい。(都に対して) 我々と話し合いもしないで一方的なことをやっているのは、我々を一人間として見ていないから。お願いします!」(Iさん)

「ん、だから、ああいうところは都が抜き打ち的にやった策で、地域住民にも当事者にも言っていないから、絶対反対。・・・保護じゃなくて、追い出しとか思えない。・・・絶対反対。」
(Iさん)

「(新光館について) 排除と一時しのぎの収容ばかり続ける都の対応に住民の声は冷ややかそのもの。お役人サン、この仲間の声をどう受け止める?」

【資料】

声明

東京都・福祉局は8月21日、突如として「新宿駅西口地下広場路上生活者の自立支援事業」なるものをマスコミに発表し、このための「街頭相談」をその僅か4日後の同月25日に実施しようとした。この事業の対象者となる新宿西口地下広場に起居する野宿者に対し、何等事前に説明も行わず、張り紙と場内放送で「自立の意志のあるものは集まってください」なる不親切な告知だけで、この事業は一方的に開始されようとした。

「街頭相談」当日「寝耳に水」の事業開始に際し、当該野宿者が「説明」を求めて街頭相談会場に殺到し、福祉局職員を取り囲んだのは必然の成り行きであった。「当事者のため」と言いながら、当事者には対象人数や入所施設名など具体的な情報を事前に一切提供せず、排除の不安をいたずらにかきたてた東京都の今回の事業は、その冒頭から、我々との間に深い溝を作るに至った。

そもそも、今回の事業が開始されるに至る経過は、西口地下広場の「環境整備」と称した野宿者排除を目的とする、4月から連日早朝に繰り返されたガードマンによる「退去勧告」行為、そして4月下旬に発表された、排除のための収容先である北新宿における自立支援センター暫定実施計画の流れをくみ、北新宿センター計画の実質的な「凍結」宣言を受け、暫定施設の暫定措置として立案されたものである。東京都が当初から「保護」を目的として路上生活者対策を進めてきた訳ではないことは、昨年1月の強制排除事件や知事青島の一連の差別扇動発言をみても周知の事実である。

今回発表された事業の東京都の真意も「今年度中に200人の支援を行いたい」（8月22日付読売新聞）と豪語するよう、今年度中に西口西口地下広場の「環境整備」を行いたい、すなわち野宿者を都庁の庭先から新宿区内に分散させることを目的としたものであろう。

本年3月6日、東京都の強制排除策が東京地方裁判所において批判され、従前のような力任せの路上廃材撤去作業がしにくくなつた今日、画に描いた餅のような「支援策」を人参ニンジン変わりに目の前にぶらさげ、そこに誘い出し、順次分散を強い、西口地下広場を「正常化」しようという目論みが見え隠れする。少なくとも我々はこのような疑念を持っている。

それでなくとも今回、都が突如発表した事業内容は、場当たり的、かつ中途半端なものでしかない。我々野宿者の実態すら知らず、「自立支援」とは名ばかりのただ野宿者を地域にタライまわしにするだけのものである。長野オリンピックにあわせ、国際的に恥をかきたくない青島都政のその場しのぎの施策でないと批判できよう。対象者はたったの20数名、しかも収容先は宗教法人・救世軍が経営する新光館など民間の宿泊所（新光館は社会福祉的な施設ではなく、実態は宗教行事を強制するなど宗教施設と同様である）、入所期限は原則1ヵ月、最大でも2ヵ月。生活保護法にもとづく「保

護」ではなく、権利も主張できない法外収容、出て行けと言われば簡単に放り出される。もちろんそこに住民票が置けるわけではなく、就労も住み込み仕事しか探せない。「職業相談」なるものも、職安に通わせるだけのもの。昨年1月、強制排除の受け皿として設置された、芝浦臨時保護施設の実例を見るまでもなく、例え就労できたとしても、短期契約の飯場労働や労働基準法すら守らない悪質業者などでの不安定就労でしかなく、安定した就労にもとづく「自立」など望むべきもない。結果、入所期限が切れ、宿泊所から追い出され、再び野宿の道か、さもなければ働いた賃金すらもらえず現場から逃げ帰り、再び野宿の道か。

結局、芝浦の「失敗」（就労したとされる入所者のほとんどが野宿へと舞い戻ってきた）を繰り返すだけである。何等、過去の実例を反省することなく、ただ、単に西口地下から野宿者を排除・移動させようという発想のもとでは、抜本的な対策は程遠い。都が排除を目的とするのではなく、本当に野宿者の「自立を支援」するというのなら、仮設住宅もしくは都営住宅などを収入実態に則し提供したう上で、高齢労働者でも出来る軽作業労働を公的に保障し、安定した生活と就労を率先して確保すべきであると、我々は4年来主張し続けてきた。それが野宿者の願い・要望でもある。中途半端で場当たり的な今回ののような施策の実施は世間体は良いだろうが、我々からすれば、何等将来の展望すらもてない愚策である。

我々は、今回の「自立支援事業」の強行には強く反対する。

もちろん、東京都が一方的、強行的な態度を改め、まず我々との間で事前の「説明」を行うというのであれば、我々の「街頭相談」に対する姿勢も変わってくるだろう。無為な混乱を避けるため、我々の側からも事前の「説明」を行う用途には要望をする。当事者に何等事前に「説明」もせず、施策を強行しようとする態度こそ、この間の事態の最大の問題点であるからである。我々の批判・疑念が当たらぬと言うのであれば、都は堂々と我々の前に出て論議をするべきであろう。いくら正しいことをやっていると自覚しても、対象者にこのような批判や疑念を多くもたれていては、何事も進まない。

西口広場の路上生活者対策すらまともに出来ないのであれば、都内3000名もの路上生活者対策など話にもならないことを都は自覚すべきである。

1997年9月10日

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議（新宿連絡会）事務局

名古屋・林訴訟 高裁で不当判決

野宿労働者の生活保護を受ける権利を求めてたたかわれている名古屋の林訴訟。昨年10月、名古屋地裁は林勝義さんの訴えを全面的に認める画期的な（しかし当たり前の）判決を出しました。（この通信でも第1号で紹介）しかし敗訴した名古屋市当局は控訴し、たたかいは名古屋高裁の場に移されることになりました。

その控訴審の判決が8月8日、出されました。その内容は実にひどいものでした。

判決は、「稼働能力（林さんは医者が『軽労働可』と判断した）があつても実際にそれを活用する場がないれば生活保護の対象になる」とした点では一審と変わりないものの、名古屋市側が提出した就労あっせん状況の資料などを恣意的に解釈し、「当時、林さんは努力すれば仕事につくことができた」と判断したのです。裁判官は野宿労働者の置かれている社会的状況をまったく理解していないと言えましょう。

林さん側は上告し、最終的な判断は最高裁に持ちこされました。「稼働能力があること」だけを理由に生保から野宿労働者を締め出してきた全国の福祉事務所の対応が法的に見て誤りであることが立証されたことには変わりありません。林さんたちが先頭を切って進めてきた生活保護をかちとるたたかいの成果を新宿や各地でどう生かしていくのか、私たちも考えていきたいと思います。

*

もう一つ、名古屋では8月28日に高速道路高架下の若宮大通公園にあるジャングルジム「冒険とりで」で野宿する仲間が、「橋脚工事」を名目に名古屋市当局によって強制排除されるという事件も起こりました。野宿の仲間や笠島連絡会の仲間40人がスクラムを組み、抵抗、工事は強行されたもののフェンスの周りに再びダンボールハウスを作っている、ということです。「冒険とりで」で野宿をしていた仲間は、新宿の仲間との交流を望んでいるということなので、新宿連絡会としてもまさに他人ごとではない、こうした事件をきっかけに各地の仲間との連帯を深めていきたいと思います。



名古屋高速道路の橋脚の耐震工事とともに、名古屋市中区若宮大通公園の「冒険広場」から退去させられた野宿生活者が三十日、工事フェンスの東側に、段ボールなどを約十個並べ、再び居住し始めた。

工事現場横に 再び居住開始

「冒険広場」を追い出された野宿生活者は、約百組西側の高速道路下などに移動していたが、「名古屋市」の姿勢に納得がいかないなどの理由で再び居住を移した。工事のフェンスで明かれた元の場所には戻れず、フェンスの外側に荷物の持ち込みを始めた。

墨ぬり国賠訴訟にご支援を！

新宿野宿労働者に対する東京都の雇った暴力ガードマンによる執拗な追い出しと新宿署の弾圧に怒りを感じ、去る4月29日の抗議の闘いに参加したところ、なんとガードマンに対する「暴行」容疑でデッチ上げ逮捕されました。連絡会の仲間をはじめとする多くの闘う仲間の反弾圧の闘いによって、5月20日処分保留で尊還されました。この弾圧に対する闘いをともに担っていただいた全ての仲間に改めて感謝いたします。

●警察による人権侵害を許すな！

逮捕時の暴行に加え、指紋採取への抵抗に対する暴行、さらに私の顔から首に指紋採取用黒インクを採取用ゴムローラーで塗りたくるという警察による暴行と陵虐はすさまじいものがありました。また、暴行による負傷（右肘ねんざなど多数）に対する医療も30時間にわたって拒否。私はこれらの人権侵害について獄中より日弁連人権擁護委員会に人権救済の申し立てを行い、また、弁護士・救対から新宿署に抗議したところ「（私が）自分で塗った」などと言う始末です。

●墨ぬり国賠訴訟へのご支援を！

新宿署の被疑者への暴行・陵虐は、東京都と新宿署の野宿労働者への対応の差別性を露にしたものであり、許しがたい暴挙です。国家賠償請求訴訟（愛称？墨ぬり国賠）は、この暴行・陵虐の責任を裁判で追及することを通じて、東京都の差別行政と新宿署のそれへの加担の実態を暴露し、弾圧に反撃する闘いの一環として闘います。そのため、新宿連絡会、争議団連絡会議、中部交流会、森産業・微生研労組、被弾圧者の私が呼びかけ、「4・29新宿野宿労働者弾圧国賠訴訟を闘う会」（略称・429の会）を結成しました。10月17日には第1回の裁判が行われます。この闘いへのご支援（裁判の傍聴等）を要請する次第です。

墨ぬり国賠裁判 第1回公判 10月17日（金）午前10時30分より
東京地裁民事15部（631法廷）にて

「4・29新宿野宿労働者弾圧国賠訴訟を闘う会」（略称429の会）

《連絡先》

◎東京都台東区1-25-11山谷労働者福祉会館気付

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議

☎03(3876)7073

◎東京都江東区大島5-47-9-407

森産業・微生研労働組合 新居崎邦明

《カンパ送り先》

郵便振替口座 00100-3-397060 「429の会」

旅好きの友人が言った。

「日本一の急勾配を誇った信越本線が廃線になる。」お金がかかるし、新幹線ができる、もういらなくなつたから。（いらないのは東京・長野間を往復する人だけである。地元の人は足がなくなる。）

「夜間の急行がなくなつていい。」お金がかかるし、特急ができる、もういらなくなつたから。

「その昔、国鉄マンと呼ばれた駅員たちは、日本の発展に貢献しているという、気概があったから、夜中に1本ぐらいしか通らない夜行のために一晩中駅守りをしていられたんだ。」

そうなの？ で、日本が発展して、便利で豊かになって、で、国鉄マンはどうなつたの？

そのときなぜか、パトロールで出会ったたくさんの野宿労働者の人たちを思い出した。

一つの国に歴史があるように、一つの街に、歴史があり、人間の一人一人に、歴史がある。

ここに一人の労働者がいて、彼には52年の歴史があるとする。その歴史は、終戦に始まって、戦後の復興と、経済成長の歴史を駆け抜けてきた日本の歴史でもある。

彼らは『日本の発展に貢献してきた』なんて、気取ったことは言わない。彼らの前に、小綺麗な言葉や、上辺だけのヒューマニズムは、私には色あせて聞こえる。

私が知っているのは、およそ高尚な内容からは縁遠いすければな話ばかりする重機オペのオヤジが杭打ち機を操作するときの珍しく真剣な眼、炎天下の鉄板の上でやっこら運んできた鉄筋を圧接していた圧接屋が、ヘルメットをずらした時にバケツの水のような音を立ててこぼれた汗。日陰のない現場でコンクリをならしていた左官屋のお国言葉とツルツルに仕上げられた床、仕事が始まる前に、こっそり花札に混ぜてくれた大工のオヤジの黒くてゴツゴツした手。

豊かに発展にした都市を、サラリーマンや若者たちが闊歩する。評論を述べる人もいる。

しかし、彼らが闊歩するその道に、碎石やアスファルトを敷いた人の無言の手がある。彼らが闊歩するそのビルの、基礎を打った人たちの無言の手がある。

あの炎天下や、重い物や、激しい振動や、時には事故がその人たちの命を消耗する。五十の声と共に、仕事がなくなっていく。『もういらないから』とでも言うのだろうか。

私は不思議で仕方がない。なぜ彼らが保障されないのでしょうか、なぜ役人がエラいのだろうか。なぜ彼らが若者たちの笑いざめく中を、目線を避けてひっそりと歩き続けなければならないのか。

戦後焼け野原だった東京に、この都市を築いたのは誰か、ほとんどは身一つでその時代を生き抜いてきた日雇労働者たちの『無言の手』ではないのか。私は覚えている。新宿には高層ビルなど一つもなかった。京王プラザを皮切りに、次々と超高層ビルが立ち並び、最後に都庁ができた。

いや、建築に限らず、私達の生活の中にあるものの中で、人の労働によらずにできるものは何一つないと思う。

今もパトロールで出会う野宿者たちは多くは語らない。（まあ、私と話しても仕方ない、と思うのだろうが）私も語らない。私はただの一通行人である。ただ、今も身一つで生き抜いている人たちの、一人一人の五十年、六十年という歴史が、使い捨てられたゴミのように路上で終わるのは、チガウと思うからパトロールに行く。本当は、全ての通行人にこそ気付いてほしい。

（K・表紙の絵も）

未だ続く財政危機！

引き続き、カンパをお願いいたします。

会計報告（7～8月）

【収入】

カンパ	190,640
路上カンパ（含む通信等売上）	104,903
通信会員費（22口）	110,000
フリーマーケット売上	58,228
計	463,771

【支出】

炊事関連費	350,721
交通費	103,900
発送費	28,690
印刷費	87,941
ゴー・DPE	6,005
文具・図書費	3,576
車両関連	13,920
電話代	24,027
薬代	5,019
備品・雑費	11,227
会費（429会）	3,000
山谷米代貸付	234,531
計	872,557

【収支】

△408,786
【緑越金】△323,523
【残高】△732,309

「山谷米代貸付」…山谷の共同炊事で使用している米を新宿分と共同購入しているため、当面、新宿連絡会が貸し付けるという形を取っています。ご了承下さい。

☆カンパ送り先⇒郵便振替口座 00170-1-723682 「新宿連絡会」

通信会員費（年5000円）をお振り込みの方はその旨、明記してください。

カンパのお願いばかりでいつもいつもすみません。

今後ともご協力お願いいたします。

『新宿ダンボール村通信』は、次号（第7号）から紙面を大幅に刷新します。
新しくなる『通信』にご期待を！また皆さんのご意見、ご批判もお待ちしています。

編集・発行：新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議（新宿連絡会）

連絡先：〒111 東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付

〒160 東京都新宿区西新宿1-1-1 インフォメーションセンター前 新宿ダンボール村
☎ 03 (3876) 7073 / 030 (818) 3450